



発行 日本リスク研究学会

会長 東海 明宏

事務局 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学社会学部 土田研究室気付 発行責任者・広報担当 近本一彦

TEL. 06-6368-1121(代) FAX. 06-6368-0735

mail: office1@sra-japan.jp URL: http://www.sra-japan.jp/cms/

日本リスク研究学会は、日本におけるリスク研究と研究者相互の交流を図ることを目的として、1988年に米国に本部をもつ国際的なリスクについての学術団体であるSRA(The Society for Risk Analysis)のJapan sectionとして発足しました。現在では、米国、欧州、東南アジアの諸学会と緊密な連携をとりつつ独自の活動を展開しています。

1. リスク放談(第7回)

この「リスク放談」のコーナーでは、著名な先生方のリスク研究に関する想いやご意見を紹介致します。

新春随想 — 私のリスク学

日本リスク研究学会名誉会員 小林定喜

1. William Blake の詩

久しぶりに佳い映画を見ました。小川洋子原作、小泉堯史^{たかし}監督・脚本による映画『博士の愛した数式』です。2006年の映画ですから、もうご覧になっておられる方も多いでしょう。「今頃？ 遅れてますね」と笑われるかもしれません。中学生から老人まで、人生入門、数学入門、そして、リスク学入門として、「おすすすめ」です。

話の筋の詳細は省きますが、映画には、8時間しか記憶を保てない記憶喪失障害のある数学者である一人の博士、頭のとっぺんが平らであるが故に博士にルート($\sqrt{\quad}$)と名付けられた少年、そして、シングルマザーで、家政婦をして生活の糧を得ているルート少年の母親が登場します。成長して中学校の数学教師となったルート少年が生徒たちへの初めての授業で自己紹介を兼ねて、自分と母親の博士との、数学を軸として展開する、私には話がどのように進展していくのか予想がつかず、ドキドキするような、交流の追憶を語っていきます。そのクライマックスに、オイラーの公式が現れるのですが、すべてを語り終えたその終幕で、少年の思い出の海辺の風景を背景に、ある一つの詩が幕面を流れ、朗読されます。

一つぶの砂に 一つの世界を見
一輪の野の花に 一つの天国を見
てのひらに無限を乗せ
一時^{ひととき}のうちに永遠を感じる

(2 ページへ続く)

< 目次 >

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. リスク放談 (小林定喜) 2. From the President (東海明宏) 3. 第21回秋の年次大会を終えて (土田昭司) 4. 若手ワークショップ報告 (塚越芳樹) 5. SRA ボストン大会 (前田恭伸) | <ol style="list-style-type: none"> 6. 話題提供・会員からの投稿 7. 委員会報告 8. 事務局便り 9. 編集後記 (近本一彦) |
|--|---|

(1 ページからの続き)

映画を見終わり、「ウーン」と唸った私の心に、理屈なしに、”そのままに” にしみ込んできた、すてきな詩文です。 その数10秒の感動の後に、私の脳裏に浮かんできたのは「あんりゃ、これは日頃、私の考えているリスク学の真髄じゃ!」、という思いです。

2. 私の自分流「リスク学」

「一つぶの砂に 一つの世界を見る」 — これこそリスク学の在りようを適切に言い表した言葉ではないでしょうか。「一つの世界 (a World) 」は、あるいは一つではなくて「全世界 (the World)」であるかもしれません。リスク学の出発点はリスク分析・リスク評価ですが、これには科学的知見を基にしつつも、深い洞察力と先見性（未来をみる）が要求されます。私は身の回りの、学問にはあまり縁のない友人や一般の人たちから「(定年後ぶらぶらしているようですが) 今は何をしていますのですか」と問われ、「リスク学の勉強です」と答え、そこで、「リスク学って何ですか、何をしていますのですか?」と質問されることがよくあります。私は、半ば冗談交じりに、「まあ、有り体に言えば、予言、予告の科学ですね。パチンコ屋に入っどどの台が出るかを当てるようなものですよ」と答えます。それを聞いた皆さんは「え! 本当?」と疑い+蔑み・同情の目で見たり、感心したりしてくれます。

リスク評価、あるいは、リスク・アセスメント（リスク算定）は、未来の推定で、過去から現在に至る統計学・推計学・実験科学などで得られた科学的証拠（データ）に基づき、何らかの推定法（外挿法、類推法）を適用して「予測される害の大きさ（リスク）」を求めるという作業です。1行で表すと、

$$R \text{ (リスク)} = [\text{統計・推計・実験データ}] \cdot [\text{外挿法}] \cdot f(X)$$

で、ここで $f(X)$ はリスク学に要求される特別の「何か」です。私はこの「何か」は「一つぶの砂に 一つの世界を見る」という「未来を見抜く先見性、洞察力」であり、このことがリスク学が自然科学に留まらず、人文科学と融合した学問であるとする所以である、と考えるのです。

「リスク」は推定値で、実数 (Real Number) ではありません。いわば、” Imaginary Number ” です。この Imaginary Number が「Real Number になる、すなわち具現化して実害となる」ことを押さえる、つまり、Imaginary Number であるうちに処理してしまうのが「リスク管理 (Risk Management) の本質」です。「博士の愛した数式」流に言うと、管理をせずに放っておくと、リスクという屋根 (ルート√) の下に眠っているリスク評価値という” Imaginary Number ” が何らかの「自然の摂理」に従って、思いもかけぬプロセスで” Real Number ” に変換されていきます。「博士の愛したオイラーの公式」は私にこのような連想を誘います。「無限と永遠とを今この一点に凝縮する」ことが出来れば、この「自然の摂理」を理解でき、統一的、普遍的に記述することが出来るでしょう。それには「天賦の才能と幸運 (Serendipity)」が必要ですね。リスク管理は^{あひる}家鴨の水掻きのようなもので、うまくいってれば誰にも気づかれず、「神、そらに知ろしめす、すべて世は事も無し (God's in his heaven, All's right with the world)」となります。行政プロフェッショナルはすべてこれを目指すべきなのですが――。

私はまた、リスク学は「実学」である (あるべきである) と思っています。医学、工学、農学のように、実際の生活の役に立つ (べき) 学問です。人々の日常の生活や、行政・立法・司法、産業、に指針を与えるべき責務のある学問です。リスクの対象となる事象には、自然災害も技術や社会などの人工の要因も、地域 (国) 特性のあるもの、全世界的 (Global) なもの、相互干渉的なもの等、様々ですが、近年とりわけ重要

になってきているのは **Global** なものです。従って、「リスク管理」、及びその、より広汎な概念である「リスク統治 (**Risk Governance**)」も国際的に整合性を持って実施されるべき状況になっています。リスク学は、また、様々な自然・人文専門科学が係わる学際的科学 (**Interdisciplinary Science**) です。この「学際性」は皆が認識していることではあるのですが、実際に「学際性」を生かした研究や調査が活発に行われているかどうかははなはだ疑問です。

3. 用語の翻訳

さて、「**Blake** の詩」の世界に戻ります。映画による感動の時間の余韻の中で、**Blake** の詩の原文を読みたい、という気持ちが起こりました。この詩は『無垢のまえぶれ (**Auguries of Innocence**)』と題された英国の詩人ウイリアム・ブレイク (**William Blake, 1787-1827**) による 1 3 4 行にわたる長編の詩の冒頭の一節であることが分かり、見つけ出した原詩文は以下のようなものです。

To see a World in a Grain of Sand
And a Heaven in a Wild Flower,
Hold Infinity in the palm of your hand
And Eternity in an hour.

これを一読して冒頭に記した和文の詩とは何かが違う、という違和感を憶えました。そこで、この長い詩全体を読んで、この冒頭の詩文を検討してみることにしました。全体を通じて寓意、暗喩が多く、解釈がとても難しいのですが文章の構造はとても単純で、冒頭の 4 行を除いたいずれの部分も主語-述語が明確です。つまり、文章として完結しています。その観点からこの冒頭の 4 行を読みますと、「**To see a World and a Heaven** ("**a** World が"**the**" World になっている版もあるようです)」は、隠れている主語の「あなた(**You**)」が「**World** と **Heaven** を見る (理解する) ためには (目的)」、あるいは「そうすれば見えるようになる故に (結果)」、**Infinity** と **Eternity** を **Hold** せよ (命令形、述語)」と読むべき、と理解されましょう。(中学・高校レベルの英文法の話で恐縮です。) この映画で引用されたものも含めて、巷間に流布されている様々な翻訳ではこれらの 4 行がそれぞれ独立した、対等・並列の関係にあるような構造になっていますね。これでは **Blake** が本来意図したところが曖昧になってしまっています。

長々と書きましたが、「他人の日本語訳文の解釈は慎重に。(日本語としてスラスラと読めても内容は違っていることあり)」、また、「翻訳する時は背景と文脈全体の意味をつかんで、本来意図されていることが正確に伝わる日本語にする。直訳辞書用語は使わない。」という私が訳文(用語も含めて)について日頃留意している基本方針の説明を、” 事の序^{ついで}に ”、いたしました。詩文翻訳の私の試みは他の方々の訳と合わせて注記に示します。(注 1.)

リスク学が実学、学用学であるからにはリスク関連用語は一般人、専門分野を異にする専門家、そして産業界、官界の人々に理解し易く、誤解を与えない用語であること、また、その定義(意味や内容)について専門分野間、縦割り行政の官庁・法律法令間で整合性がとれていることが必要です。この観点からみると、現在国内で当然のこのように流通している外国語(英語)由来のリスク関連用語には検討を要するものが多々あります。” **Excess Risk**” に対応する「過剰リスク」、"**Persistent Organic Pollutants, POPs**"に対応する「残留有機化合物」、"**Precautionary Principle**"に対応する「予防原則」、” **Compliance** コンプライアンス” に対応する「法令遵守」、等々です。国際的整合性も大切なことですが、基本的用語で定義・内容に関して整合性を欠いていることがあり(例えば、リスク分析 **Risk Analysis**, ; リスクアセスメント(リスク算定))

Risk Assessment ; リスク評価 Risk Evaluation ; リスク管理 Risk Management)、これは翻訳問題を越える大問題です。これに関しては大島輝夫先生が昨年の年次大会で我が国の法令の問題として指摘されました。私のこの文章の中でもむちゃくちゃです。これは本当に「ホットケナイ」状況ですぞ！！

4. 学会の役割

リスク学が実(用)学であることに関しては、日本リスク研究学会はすでに優れた活動をしています。大阪大学大学院工学研究科の盛岡通教授が嚆矢である「環境リスク管理のための人材養成プログラム」、本学会が設立運用している「リスクマネージャ養成プログラム認定制度」、徳島大学の関澤純教授による「食の安全とリスク研究部会」の活動等々です。しかし、社会へのリスク情報の発信という点についてはまだまだ不十分に思われます。例えば、今、世界中に経済恐慌を巻き起こしている米国のサブプライム問題について言えば、このような事態になる大分前に警告を発していた米国の経済学者がいたと聞きましたが、SRA、日本リスク研究学会はどうだったのでしょうか？日本国内の問題では登録型労働者派遣を容認した労働者派遣法(1986年施行)、行政機構(諸官庁)の組織疲労、医療崩壊などについてはどうなのでしょう？1988年の学会発足時、東大山上会館で開催されたシンポジウムでは補助椅子を入れるほど会場は超満員で、そこには単に物珍しさからだけではない、本学会への社会の大きな期待が溢れていました。学会は情報交流のサロンでよい、という考え方もありますが、私は、国連に対して学問的支援をしている国連学会のごとく、日本社会に対して時宜に応じたリスク情報を提供する学会であってほしい、それが出来る段階に本学会は成熟している、と思っています。

情報発信といえ、前項で述べたように、適切なリスク用語(日本語として)と用語の定義の問題があります。不適切と思われる用語は官庁起源であることが多く、私が内閣府で数年働いた経験によると、官庁側は個人の提言では容易に反応できず、”何らかの”学会が問題提起、提案をしてくれることを期待しています。本学会はリスク学事典(増補改訂版2006)とリスク学用語小辞典(2008)という立派な”現状説明”の出版物を編集、公刊しており、今や”正確でわかりやすく、整合性のある用語とその定義の整理、提案”へと進む基盤が整った、と思います。日本学術会議や他学会との調整が必要になるかもしれませんが、リスク用語の整理に関してはまずは本学会に働いてほしいものです。

リスク学の学際性については昨年、嬉しい経験をしました。関西大学で開催された第21回年次大会では特別プログラムとして前日に若手研究者による若手研究者のためのワークショップが行われました。(1)有害物質や人体の健康状態を「はかる」ための装置の開発・製造に関して島津製作所三条工場の見学、そして(2)アサヒビール吹田工場の見学と製品の品質保証についての講演(山田隆司保証体制センター所長)、および、「金融及び組織に関するリスクの講演会」として「金融工学とリスクマネジメント -VaRの理解と活用- (日本銀行碓井茂樹氏)、ならびに「組織とコンプライアンス(文教大学鎌田晶子氏)」の二つの講演です。私は高齢者ながら後者の企画に参加させていただき、金融工学や属人的組織風土など、日頃望んでも出来ない、異分野の入門学習をいたしました。この後者のワークショップを企画運営された農業・食品産業技術総合研究機構の塚越芳樹氏にハット・オフ！若手のみなさん、これからどんどん学際交流企画を打ち上げ、視野を広めましょう！

最後に若手のみなさんへのお願いエールをもう一つ。リスク学が国際性のある学際的、総合的な性格を有する実学であることを踏まえて、リスク研究学会のあるべき姿、果たすべき責務、なすべき活動などの将来展望を、意力に溢れた若手のみなさんが英知を集めて検討して下さることを期待したいのです。昨年の年次大会では、その冒頭で「日本リスク研究学会史座談会」、そして、その日の午後には国際シンポジウム「The Past and the Future of Risk Analysis」が開かれました。これらはきわめて意義深い企画で、リスク研究学会・リスク分析学会設立から現在に至る学会の理念と対応、世界の趨勢などについての情報が日本および諸外国のリスク研究の大家である諸先生から開陳され、討論も活発に行われました。残念ながらプログラ

ム編成上の理由であったのでしょうか、若手研究者の参加が少なかったことが悔やまれます。今年度は是非、昨年のシンポジウムを踏まえて、大勢の学会員の参加の下に若手研究者による将来展望の論議をしていただきたいものです。

註 1. 私の試訳と別訳詩文の例

(1) 私の試訳

一粒の砂に世界を観、
一輪の野の花に天国を観る。
さあれば君よ、その^{てのひら} ^{むきゅう} 掌に無限を包み、
このひととき^{ひととき} 一刻の中に永遠の時を刻み給え。

英文法を離れて、訳詩を原詩の雰囲気こそこはかとなく伝えた「新しい詩」として読むことにすると、映画が引用した詩文は、美しく、魅力的ですね。

それでも私は呟く。「せめて順序を変えて、前半の2行を後に持ってきてくれたら、原詩の意図も匂ってくるのにね。こんな具合です：てのひらに無限を乗せ、一時のうちに永遠を感じ、ひとつの砂に一つの世界を見、一輪の野の花に一つの世界を見る。ああ。これでは散文だ！」

(2) 別訳詩文の例

a.

ひとつぶの砂にも世界を
いちりんの野の花にも天国を見
きみのたなごころに無限を
そしてひとときのうちに永遠をとらえる

(ブレイク詩集 寿岳文章 訳 世界の詩 55・弥生書房、1984、絶版)

b.

一粒の砂にも世界を
一輪の野の花にも天国を見、
君の掌のうちに無限を
一時〔ひととき〕のうちに永遠を握る。

(対訳ブレイク詩集 松島正一訳 岩波文庫赤 217-2、岩波書店、2004年6月)

註 2. ちなみに、小川洋子さんの原著には Blake のこの詩は出てきません。数学を小説に仕立てた小川さんの才能もすごいです、このベストセラー小説の映画化に当たって終幕にこの詩を登場させた小泉監督にもまた、脱帽です。ルート青年教師が博士についてのお話を終えた時に「時は流れず」と板書しますが、これで小泉監督のこの詩への深い理解と意図とがうかがえますね。

謝辞：この随想を書く機会を与えてくださった近本理事と編集委員会の皆様に御礼申し上げます。また、リスク研究に係わる問題点について貴重なご示唆をくださった諸先生、とりわけ木下富雄、大島輝夫先生に御礼申し上げます。そして、この随想を書きながら読み返した多くの文献の著者に、多数なので列記を割愛させていただきますが、厚く感謝いたします。これらの中で、原稿の締め切り時間が迫っているのに、つい”

じっくりと”読んでしまった3冊を、お礼と紹介を兼ねて、以下に記します。この3冊はそれぞれ違った意味で、もし、まだお読みになっておられなかったら、ご一読” オススメ”です。

1. 瀬尾佳美 リスク理論入門 中央経済社 2008年10月 (¥2,310 税込み)
 2. 小林政子訳 神の火を制御せよ (Pearl S. Buck, Command the Morning) ^{こみち} 径書房 2007年7月 (¥2,300+税)
 3. 宮永一郎訳 科学技術のリスクー原子力・化学物質・高速交通 (H.W.Lewis, Technological Risk) 昭和堂 1997年 (¥2,310、出版社品切れ)
-

2. From the President (会長からのメッセージ)

会長 東海明宏

激動の世の中です。金融、雇用、・・・など社会揭示システムへ波及するリスクが日々我々の眼に飛び込んできています。このようなリスクの管理にむけて、日本リスク研究学会に集積した知的基盤で何がしかの貢献ができることを切に願うものでございます。

さてつづいて、前回のメッセージの引用をお許してください。・・・本学会は、一リスク研究（その周辺に位置する様々な事項も含めて）に貢献したい一、このためにご参加された個人の集合体であります。その意味で、改めて申すまでもないことですが、学会員、そしてその周辺の関心を持つ方々に対する交流の場を提供し（年次大会、シンポジウム、セミナー等）、議論に参加していただき、その内容を共有する（学会誌等を刊行する）、ということが活動の根幹となると考えております。会員の皆様方が現場で抱えられている問題について、仮に分野が異なっても、経験を共有できれば、一步前進できる可能性が高くなります。これは、趣旨に賛同する個人の集合体であるからこそ、可能なものなのだと思います。そこで、このような活動が円滑に進んでいくための発展モデルというものを提案し、実行していくことが、今期の最重要課題となると考えております。・・・この方針に従って、以下のイベントが企画されております。今年は、4回目を数えます東アジアリスク研究会議（北京師範大学の史教授のオーガナイズのもと）も開催され、例年に比べて事業がおおございます。ぜひ、ご参加をお願いする次第です。詳細は、学会ホームページや、事務局からの案内をご参照くださいませ。ぜひ、皆様の手帳に予定を書きとどめおき願いたく存じます。さらに、H21年4月から、甲斐編集委員長のご尽力により、日本リスク研究学会誌 **Quarterly** 刊行体制へ移行する予定でございます。

皆様のご支援を引き続きお願い申し上げます。

平成21年5月17-19（日・月・火） 第4回東アジアリスク研究会議（北京師範大学）
平成21年6月19日（金）第22回シンポジウム（東大山上会館）
平成21年11月28-29（土・日）第22回年次大会（早稲田大学）

3. 第 21 回秋の年次大会を終えて

実行委員長 土田昭司

日本リスク研究学会が 1988 年に設立されてから 2008 年で 20 年が経ちました。その設立 20 周年を記念する第 21 回年次大会を関西大学百周年記念会館にて開催することができましたことを実行委員会を代表して改めて厚く御礼申し上げます。

第 21 回年次大会は 2008 年 11 月 29 日(土)、30 日(日)の両日に開催されました。参加者は 181 名。学会賞受賞者 3 名の記念講演とともに、口頭発表として台湾からの参加者による英語セッションでの発表を含めて 74 件、ポスター発表が 13 件ありました。また、学会賞授与式と、懇親会において名誉会員証授与式がおこなわれました。

本年次大会では、20 周年を記念して、総合テーマ「20 周年記念大会：過去を振り返り、未来を考える」のもと、「日本リスク研究学会史座談会」と、「国際シンポジウム」が企画されました。

日本リスク研究学会史座談会には、2 代会長の横山栄二先生、3 代会長の木下富雄先生、4 代会長で初代事務局長の池田三郎先生にご登壇いただきました。体調のことで出席いただけなかった初代会長の末石富太郎先生をはじめ歴代会長の多くの先生方には既にニュースレターにて学会設立などのことについて貴重なお話や資料をご披露していただいておりますが、ご登壇いただいた 3 先生に過去の経緯を踏まえて学会の将来についても語っていただけたことは大変に有意義なことでした。

国際シンポジウムは学会企画として行われましたが、リスク研究についての世界規模の問題(globality)と地域固有の問題(locality)に対して過去を検証しつつ未来を展望することに焦点があてられました。欧州リスク研究学会(The Society for Risk Analysis, Europe)の前会長であり米国リスク研究学会(The Society for Risk Analysis)の国際連携問題担当理事でもある Salvi 氏、韓国環境毒性学会の会長 Shin 氏、オーストラリア／ニュージーランド・リスク研究学会の前会長 Leonte 氏、そして日本リスク研究学会から土田が、それぞれの地域におけるリスク研究学会の現状と歴史を紹介しつつ、リスク研究の国際的連携のあり方についてフロアも交えて活発な討論が行われました。設立前から常に諸外国との密接な連携を保ってきた本学会にとっては、国際的なリスク研究体制の再編成が進む中でどのような貢献をなすべきかについて有益な示唆が得られたと思います。ただ、米国リスク研究学会(The Society for Risk Analysis)の元会長 North 氏の来日が叶わず web やビデオでの参加もできなかったことが悔やまれます。

なお、口頭発表のセッションは次の通りでした（括弧内は発表件数）。リスク認知(5 件)、リスク・コミュニケーション (1) (5 件)、リスクコミュニケーション (2) (5 件)、リスク評価(5 件)、ツール・統計(5 件)、リスク管理 (1) 企業・個人のリスク管理(5 件)、リスク管理 (2) 行政のリスク管理(4 件)、食品リスク(5 件)、健康リスク(4 件)、環境リスク(5 件)、社会経済・保険・金融リスク(4 件)、英語セッション(1 件)、[企画]暴露・リスク評価の最前線(5 件)、[企画]食と食品の安全と安心確保(の科学のおよび実践的検討)(6 件)、[企画]災害リスクガバナンス：地域防災力の再編への枠組み(5 件)、[企画]社会人リスクマネジャの役割と視点(5 件)。

第21回の秋の年次大会は、日本リスク研究学会設立20周年記念大会と銘打って、海外の関係学会から代表を招聘して、それぞれの現状や今後の方向性について情報を共有したことであろう。

また、個別研究内容とは別に、実行委員長であり、当学会の元会長である土田先生の企画として、日本リスク研究学会史座談会を設定され、第2代会長である横山栄二先生、第3代会長である木下富雄先生、第4代会長である池田三郎先生から、今後の日本リスク研究学会の進むべき方向性や、リスク学としての学問体系等について所見を述べられたことは非常に意義深いものであった。

各先生方には、ニュースレターの巻頭言「リスク放談」にて、大いに語って戴いているので、ここでは、座談会の様子をご披露したいと思う。

池田先生からは、リスク研究学会の創立後の当学会で扱ってきたテーマの歴史的変遷（下記参照）とイベント等の背景が紹介され、当日の話題として、21世紀のリスク研究のシステム学や政策学との違いはどこにあるのか、多様な不確実性を統合的に取り扱うパラダイム（リスク学）を構築することはできるのか、といった課題が提起された。

1988年	日本リスク研究学会創立
1989～1991年	「安全の科学」から「リスクの科学」
1992～1995年	「リスク学の体系化の試行」
1995～1999年	「リスク学の総合的な探求へ」
2000年～	「リスク対応社会への展開」

木下先生からは、ご自身のリスク学との係わり、リスク心理学とリスコミへの展開、現在のリスコミ蔓延と誤解に対する警鐘が紹介された後に、これからのリスク学として以下のポイントが指摘された。

- リスク学は、優れた学際的な分野である。
- しかし現在のところは、それは諸学問が羅列しているだけで、統合ないしは融合の段階には達していない。
- 肝心のリスク概念の定義も学問間でバラバラである。
- つまり、論理和としてのリスク学はあるが、論理積としてのリスク学はない。
- また力学的アプローチと工学的アプローチがうまく融合していない。研究者と現場の乖離を克服する必要がある。
- さらにリスク・ガバナンス、リスク文化なども含めた人文・社会科学と自然科学の融合が是非とも必要である。

横山先生からは、リスク学のベースにあるリスク評価の裏づけとなる科学をもっとちゃんと実施すべしとの苦言が呈せられた。すなわち、リスクアセスメントにおける高濃度から低濃度への外挿、種差間などヒトへの外挿、外国人データからの推定など、多くが経験的なものであり、また不確実性を多く含んだ評価過程であり、リスクアセスメントやそれをベースとするリスク学はサイエンスではないと思っていたが、20数年たっても発展してきたとは思えない。下支えとなる科学をもっとちゃんとやれ！ということである。

また、リスクマネジメントに資するリスクアセスメントでなければならない。つまり、リスクアセスメントからリスクマネジメントという一連のものとしての意思決定過程はあるだろうが、それがリスク学、すなわち学問として成り立つかどうかは、疑問であるとされた。

木下先生は、論理積（リスク学の融合）の必要性を主張されていたが、一方、池田先生は、リスク学の統合、意味合いとしては、木下先生の言われる論理和でよいのではないかと意見されていた。

いかなる分野においても通じるリスク概念が構築できれば、それが一番良いが、それは無理であろう。不確実性をキーワードとした枠組みでならば、横断的に通用するものが構築できるかもしれないとの示唆があった。

4. 若手ワークショップ報告

「ビール工場見学と、金融及び組織に関するリスクの講演会」報告

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所 塚越芳樹

日本リスク研究学会の助成により、大会前日の11月28日（金）にビール工場見学会と、講演会を実施いたしました。本助成の目的は、当学会の若手会員の交流とネットワーク作りの支援です。そこで、当学会から新たなリスク研究の潮流を創出するため、分野を横断した人的ネットワークが作られるように、様々なバックグラウンドを持った参加者が集まるワークショップを考えました。結果、「食品企業のリスク対策」、「金融工学におけるリスク」、及び「心理学的なリスク」と幅広い分野の講演を半日に纏めて準備いたしました。実施前には不安もありましたが、参加者も集まり、充実した時間を過ごせました。その成果についてスポンサーである会員の方のご評価を仰ぐ必要があることと、またこの機会を与えていただいたことへのお礼を兼ねて当日の様子をご報告申し上げます。

最初に、アサヒビール株式会社吹田工場において「ビール工場見学+製品保証センター所長による講演」が行われました。アサヒビール株式会社は言わずと知れた有名企業ですが、今回訪れた吹田工場はその発祥の地として、これまで100年以上ビールを造り続けている工場です。今回の工場見学会は、当研究学会会員にとって充実したものとするべく、同社製品保証センターの山田隆司所長に茨城県からお出で頂きました。

工場見学は、皆時間を忘れて堪能させていただきました。ビールの製造工程の説明や、製造ラインの見学の間、かなりの量の質問が案内の方に浴びせられました。これは、この工場は長い歴史を経て様々なアイデアが積み重ねられ、現在の形が出来たことと、参加者が大学や研究所で議論を鍛えられてきたことが相まったためでしょうか。しかし、大量の質問にも拘わらず、案内の方には一生懸命にご回答いただきました。参加者の熱心さから、屢々立止まって質疑応答が行われたために、通常の団体よりも進む速度が遅かったためか、後から来た別の団体に途中で追いつかれてしまいました。

見学の後は、別室で山田所長に「アサヒビールの品質保証体制」という題でご講演いただきました。内容は多岐に渡っており、それらを短い時間で分かりやすく説明していただきました。

この後には（おまちかねの？）ビール試飲が待っていました。同時に山田所長を囲んで、先ほどの講演に関する事、及びアサヒビールがリスクと向き合っている体制に関するディスカッションが行われました。ここでも議論は白熱し、終了予定時間をかなり超過してしまう結果になりましたが、参加者の皆さんからの

積極的な意見をお伝えしたことで、山田所長にも少しは恩返しできたのではないのでしょうか。

さらに場所を学会会場に移した後の講演会も、さらなる盛り上がりを見せました。ところで、皆さんは「VaR(Value at Risk)」や「ストレステスト」等の単語をご存じでしょうか？最初の講演者の日本銀行の碓井茂樹先生は『金融工学とリスクマネジメント高度化』研究会を主宰し、金融経済の実務セミナーにおいて、リスク評価手法を広めておられる方です。今回は、「金融工学とリスクマネジメント - VaR の理解と活用-」と言うご講演を頂き、金融の分野は全くの門外漢である若手参加者にとっても、これらの専門的なキーワードを分かりやすく理解することができました。私事ではありますが、これらのキーワードを理解していたおかげで、大会の金融のセッションの内容を少なからず理解することができました。

次の講演者である文教大学の鎌田晶子先生は、属人思考という観念から、組織風土に関する心理学の研究を進められている方です。先生は「属人的組織風土（属人風土）」が強い組織や職場では、組織的違反が行われるリスクが高いこと、組織的違反を防ぐためには組織風土を改善し、属人思考を低くすることが必要であることを調査事例に基づいて分かりやすく説明されました。寡聞にして「属人風土、属人思考」という用語は始めて知ったのですが、人間組織の様態を表し、非常に実感の持てる概念でした。また今回は「組織とコンプライアンス」という題目でお願いしたのですが、「コンプライアンス (Compliance)」という用語は一般に「法令遵守」という訳語をあてて使われることが多いが、それはその語の本来の意味や心理学における用語としての意味とは異なるという、大変重要なご指摘がありました。

これは事後談ですが、この講演会の参加募集を認知されておられない会員の方が多かったと伺いました。告知方法については、別途検討を行いたいと考えています。

本報告の最後になりますが、このような機会を頂いたこと、大変感謝しております。また本ワークショップ開催におきましては、日本リスク研究学会の理事、事務局、会員及び、各講演者の紹介者の皆さまに大変お世話になりました。また、土田実行委員長には、当日のホールの確保及び、ホームページ上での告知の掲載にご協力を頂きましたことを記してお礼に変えたいと存じます。

今回、初開催ながら大学院生から元理事までと、幅広い参加者が集まりました。今回のワークショップの最終的な成果が明らかになるのは将来だと思いますが、当日も大変実のある議論が出来ました。講演者、参加者の皆様には、大変感謝しております。また、本事業がこれから益々充実していくことを願っております。また、公募の通知はニュースレター、ホームページ等で行われておりましたが、今回の募集を「知らなかった」あるいは「自分には関係ないと軽く読み飛ばしてしまった」諸兄姉も多いかと思えます。今後は、他の若手会員の皆さまにも、この事業を活用していただき、主体的に若手研究者の交流の機会が作られていくことを願っております。(塚越芳樹、文体修正 井上知也 また、参加された碓井茂樹様、小林定喜様、大島輝夫様他から頂いた修正を反映しております)。



講習会の様子（撮影は横国大修士一年 井上知也君、防災科研 臼田裕一郎さん）

5. SRAボストン大会

米国 SRA 2008 Annual Meeting に参加して

静岡大学工学部システム工学科 前田恭伸

2008年12月7日から10日にかけて、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストンにて開催された、**Society for Risk Analysis 2008 Annual Meeting**に参加した。前回は南のサンアントニオで開催されたので、今回は北部のボストンでの開催ということになったらしい。実際、大会初日の7日には雪が降り（タクシーの運転手によれば、今シーズン最初の雪だとか）、寒い中で大会となった。

今回の大会のテーマは **The Science and the Art** ということであったのだが、サイエンスの中でも、特にナノテクノロジーに焦点をあてた大会であったという印象を持った。ここ数年 **SRA** 年次大会は発表希望の増加傾向が続いており、シンポジウムを企画してもポスターセッションやラウンドテーブルに回されることも少なくないのだが、その過密なスケジュールの中で、ナノテクノロジー関連の発表は5つものセッションにわたっていた。実行委員会がどれだけナノを重要視しているか、こういうところから読み取れる。

基調講演の中で、おや、と思ったのは8日（月曜日）にあった、**Yossi Sheffi** の **Resilient Enterprise** という講演であった。というのは、この大会の基調講演でビジネスのリスクが取り上げられるのは、めずらしいと思ったからだ。内容は面白かった。ビジネスが低確率で大きな被害をもたらすようなリスクにどのように対処するのかというテーマだ。ビジネスがリスクに対処するひとつの方法は冗長性を持つということだ。たとえばひとつの工場が何らかの災害（たとえば火災）に見舞われても、在庫に余裕があれば、復旧の間持ちこたえることができる。しかし昨今のビジネスは冗長性をそぎ落とすことで効率を上げてきた。トヨタシステムなどその例である。では、冗長性を削ったうえでリスクに対処するにはどうすればいいのか、ということである。（個人的には、この日のもうひとつの基調講演 **Elisabeth Pate-Cornell** のお話を聞いたのもうれしかった。彼女は日米合同の年次大会をハワイで開催したときの **SRA** 会長で、このハワイ学会では私たち日本人の参加者は、彼女ら実行委員会に大いにお世話になったものだ。）

もうひとつ私にとって興味深かったのは、リスク教育について、10日（水曜日）の昼食時のラウンドテーブルと、ひとつのシンポジウムが持たれたことだ。これは **SRA** のリスク教育 **Specialty Group** が企画したもので、この大会の単体のイベントではなく、昨年度 **SRA** 会員に向けて行われたリスク教育のアンケート調査や第2回 **World Congress** でのリスク教育シンポジウムなどを受けたものになっていた。アメリカだけでなく、スウェーデン、ドイツ、エジプトなどの事例が報告され、リスク教育が各地でそれぞれの形で根付いていることを実感した。**Specialty Group** からは日本のリスク教育実践者にも発表の打診があったようだが、調整がつかず、実現しなかったと聞いている。残念なことだ。シンポジウムの最後には、今年7月に開催される **Risk Analysis in Education Conference** (<http://environment.unr.edu/environmental-sciences/events/>) のアナウンスもあった。これからも、リスク教育に携わる人々の交流が促進されることが期待される。

6. 話題提供・会員からの投稿

6.1 「電磁界情報センター」の発足

財団法人電気安全環境研究所 電磁界情報センター 世森啓之

2008年7月、財団法人電気安全環境研究所内に、「電磁界情報センター」(JEIC)なる組織が発足しました。同年11月に本格的な活動を開始することとなりましたが、このJEICの活動理念および目的は、「中立的な立場から、電磁界に関する科学的な情報をわかりやすく提供するとともに、リスクコミュニケーションの実践を通じて、電磁界の健康影響に関する利害関係者のリスク認知のギャップを縮小する。」こととされています。なぜJEICのような組織が設立されることになったのか、そもそも電磁界の健康影響とは何なのか、JEICは今後どのような活動を目指そうとしているのか、などについて簡単にご紹介いたします。

1.電磁波・電磁界、健康影響

電荷の存在および空間的移動によって、「電界」や「磁界」が発生します。この「電界」と「磁界」は、お互いに密接に関わる物理量で、その物理的関連はマクスウェル方程式で記述されます。時間的に変動する電界と磁界は、マクスウェル方程式で記述されるような相互作用を起こすことで、空間的なエネルギーの流れを作り出します。これが「電磁波」です。

「電磁波」は、電界および磁界の時間的変動の速さ、つまり周波数によってさまざまな種類に分類されます。電力設備や家電製品の周辺に発生するものは、周波数が数十Hzから数百Hzという非常に低い周波数の電磁波です。放送用に使われている電波は数百kHzから数百MHz、電子レンジで食品加熱用に使われたり、通信用にも使われているマイクロ波は数GHz程度の周波数をもつ電磁波です。さらに周波数が高くなると、可視光線、紫外線、さらにはX線などいわゆる電離放射線の領域になりますが、これらもすべて電磁波の一種です。

さて、紫外線やX線など、電離放射線の人体影響はよく知られていますが、それよりもはるかに周波数の低い電磁波は、電離作用を持たないため、電離作用とは別のメカニズムで人体と相互作用します。ここでは特に、電力輸送用に用いられている商用周波数(東日本50Hz、西日本60Hz)の電磁波について触れますが、これらの電磁波は、人体と電氣的に結合し、人体内に電流を誘発します。この電流による人体内組織への「刺激作用」が、このような電磁波についてよく知られている作用ですが、実際に中枢神経系への影響を介するなどして人体に何らかの悪影響を及ぼすためには、かなり強いレベルの電磁波と人体とが相互作用する必要があります。一般的に、居住環境において、このような強いレベルの電磁波に遭遇することはほとんどありません。

一方、居住環境中に存在するようなレベルの電磁波(実際には、電磁波を構成する電界と磁界のうち、「磁界」)に長期間ばく露されることにより、小児白血病の発症リスクが増加するという疫学研究結果があります。このような知見は、そのメカニズムが不明であることや、生物学的研究による支持がないことから、「限定的な証拠であって因果的とは言えない。」とされているのですが、この、明確に否定することのできない知見の存在が、このような「磁界」に対する不安の要因の1つとなってきました。

2.JEIC 設立の経緯

さて、JEIC は、このような不安に「リスクコミュニケーション」で対処するための組織として設立されました。そのきっかけは、経済産業省原子力安全・保安院が 2007 年 4 月に設置した審議会「電力設備電磁界対策ワーキンググループ」(WG) の議論に遡ります。WG では、前述のような商用周波数電磁界の健康影響に関する知見などを踏まえ、電力設備から発生する磁界に関する規制のあり方が議論されてきました。2008 年 6 月に公表された WG 報告書では、確立された健康影響を踏まえた規制の必要性が提言されるとともに、小児白血病の可能性などに関するマスメディアによる情報バイアスの存在や、国や事業者による情報提供の不十分さとあわせて、専門家と国民一般との間の電磁界のリスク認知度のギャップの存在が問題として指摘されました。このような状況を是正するための方策として提言されたのが、「電磁界の健康リスクを中心とする様々な情報を収集し、例えば、最新の知見や日常生活における曝露状況等の情報について双方向のやりとりをきめ細かく行い、不安や疑問を持つ人々との信頼感の構築を目指すリスクコミュニケーションの増進を目的とした、中立的な常設の電磁界情報センター機能の構築」⁽¹⁾ の必要性です。

磁界は、そもそも見たり感知したりすることができず、自分がどれくらいのレベルのばく露を受けているのかを知ることも一般的には困難です(未知性)。また、ばく露との関連を示唆されているのは小児白血病で、子を持つ親にすれば非常に脅威的な疾病です(恐ろしさ)。電力設備の周辺に住む人だけが長期間のばく露を受けるのではないかという「不公平感」もあります。このように、「磁界」は、一般的にリスクを過大視されやすいと言われる要因を満たす⁽²⁾ので、「磁界と小児白血病との間に統計的関連はあるが、因果的とは言えない。」というリスク評価結果(このリスク評価結果もかなり理解しにくいですが)に比して、リスク認知が高くなる傾向にあると考えられます。

このようなリスク要因を、「メドゥーサ型のリスク」と呼ぶ文献もあります⁽³⁾。このようなリスク要因への対処戦略として、文献⁽³⁾では、信頼を得るために独立した情報提供・教育機関を構築すること、個人が、個人の生活に関わる決定に参加する機会を増やすこと、リスクに関する対話のために測定データを開示すること、などが示されています。電力設備から発生する電磁界のリスクに関する情報は、これまで、国や、電力設備を所有・運用する電気事業者が中心となって国民に提供してきました。2 つの文献⁽²⁾⁽³⁾が共に指摘するように、中立的な(独立した)情報提供機関は、電磁界の健康影響問題に対処するためには必要不可欠な組織ということになります。

3.JEIC の機能と役割

JEIC に期待される第 1 の機能は、国民への情報提供および教育です。そのために、当面は商用周波数を含む低周波数領域が中心となりますが、電磁界のリスクに関して国内外から発信されるあらゆる情報を収集・蓄積し、わかりやすい形に加工して、さまざまな媒体を用いて情報提供していく必要があります。決して一方通行的な情報提供ばかりではなく、個人の情報ニーズを汲み取り、個人の電磁界に関する不安を丹念に聞き、「一緒に電磁界の問題を考える。」という姿勢を貫きたいと思っています。もちろん、電磁界のリスクなどについて誤った情報が広まるようであれば、それをきちんと正していくのも JEIC の重要な任務の 1 つと考えています。電磁界情報データベースの構築、市民との対話集会、対象層を特化したカスタム・メイドの教育など、構想はいくつもあり、1 つ 1 つ具現化していく予定です。

なお、2008 年 12 月 12 日に、JEIC の所信表明も兼ねて、東京でシンポジウムを開催しました。可能な限り参加者の意見を聞くことを心がけ、そのため、当日参加できなかった方や意見を表明する時間がなかった方のために、後日、大阪(1月20日)、東京(2月3日)、および名古屋(2月19日)で意見交換会も開催しました。このような活動も、前述の構想の一環として、継続していきたいと思っています。なお、これらの会合の様子は、JEIC のホームページ(<http://www.jeic-emf.jp/>)でご覧いただけます。

電磁界の問題には、電力設備の立地問題も含まれます。電力設備を新規立地する場合、電力設備を立地しようとする事業者と、電磁界の健康リスクを懸念する住民との間で、電力設備および電磁界についての理解を促進するための合意形成活動が行われますが、理解促進のために長時間を要する場合があります。このような場合、住民および事業者の双方の負荷は計り知れないものとなります。また、このような対話活動に、中立（独立）な第三者機関が関与することは、電磁界問題に関してはこれまであまり行われてきませんでした。幸い、リスク研究学会では、第三者機関の関与も含め、さまざまな状況でのリスクコミュニケーションの事例が、成功例も失敗例もあわせて数多く報告されています。電力設備のような電磁界発生設備の立地において、電磁界に懸念を抱く住民と、立地側の事業者の双方にとって有効なリスクコミュニケーションとは何か、JEICなどの第三者機関が電力設備の立地問題に関与することは有効なのか、もし有効だとしたらどのような関与の方法がいいのか、など、さまざまな事例の分析を通じて、リスクコミュニケーションに関する知見を蓄積し、有効なリスクコミュニケーションの方法を提案・実践していくこともわれわれの使命の1つと考えています。

最後になりましたが、JEICは、法人や個人の賛助会員の会費で運営されています。会員の申し込みやお問い合わせなど、何でも結構ですので、JEICの活動にご関心のある方、ご連絡をお待ちしております。

(連絡先)

財団法人電気安全環境研究所 電磁界情報センター
情報調査グループ

世森（よもり） 啓之

TEL: 03-5444-2631

FAX: 03-5444-2632

E-mail: yomori@jet.or.jp

【参考文献】

- (1) 原子力安全・保安部会 電力安全小委員会 電力設備電磁界対策ワーキンググループ報告書、平成20年6月
- (2) World Health Organization, *Establishing a dialogue on risks from electromagnetic fields*, 2002
- (3) German Advisory Council on Global Change, *Executive Summary of Annual report 1998*, 1998

6.2 技術説明学とリスコミ

広報委員長 近本一彦

ここに紹介する技術説明学の正式名称は、「平成20年度原子力安全基盤調査研究 原子力安全における技術説明学」である。その公開シンポジウムが2008年12月4日に、東京大学本郷キャンパスで開催された。開催趣旨は、以下のとおりである：

技術分野からの発信や説明が不十分なために誤解が生じたり、技術者がうまく説明できないことが理由で、不必要で過剰な対応を強いられたり、開発した有用な技術が反故にされてしまうこともありうる。これ

らの問題は、技術分野からの第三者に適切に説明する基幹的な学問体系が欠落していることが原因である。そこで、本シンポジウムでは、企画者がイメージしてきた新しい学問大系としての技術説明学を披露するとともに、各界の専門家をパネリストとしてお招きして、技術説明学の必要性、有用性、具体化、他の関連学会との係わり、等について幅広い意見交換を行う。

企画者のメンバーと発表タイトルは、以下のとおりである：

- (1) 技術説明学の要件、高田毅士（東京大学）
- (2) リスクコミュニケーションとの違い、広田すみれ（武蔵工業大学）
- (3) 技術情報の表現、中村孝明（篠塚研究所）
- (4) 他分野への技術説明学の適用、中村晋（日本大学）
- (5) 技術説明学体系化のための論点、山口彰（大阪大学）

招聘された専門家は、以下のとおりである：

- (1) RC 学の視点から、木下富雄（元京都大学）
- (2) 設計技術の視点から、守屋公三明（日立製作所）
- (3) 人間心理の視点から、首藤由紀（社会安全研究所）
- (4) 情報伝達の視点から、土屋智子（電力中央研究所）

背景には、もんじゅ、志賀原子力発電所、女川原子力発電所の安全性に関する議論において、裁判による差し止めや安全審査無効といったことがきっかけとなり、技術や安全性には技術者がものづくりとして真摯に取り組んできたことが多くあり、そのことをちゃんと伝えたいというのが主眼である。

例えば、原子力発電所の建物の安全性など、“物を作るのにはこんな風に考えてきた”、“こんな意思決定をしてきた”、“分からない部分はこれくらいの余裕をみて作ってきた”、“もっと分からない部分については違うロジックで考えている”、これらを総称して「技術」と呼び、それらを適切に発信・説明する学問体系を、新しく「技術説明学」として、説明性の高い説明技法を開発したいというのである。

小生も含め、多くの参加者が課題として感じたのは、学問体系として成立しうるかという点ではなかったかと思う。学問にしなくても、上記のような趣旨であれば、必要な情報についてリスクミマインドを持って説明すれば、対応可能であろう。

傍聴者からは、「技術」の定義の必要性、対象の明確化（地域住民、一般市民、専門家同士など）、技術説明学の設定、といった部分に課題があるのではないかとの指摘があった。

一方、技術者としては、技術者の合理的で論理的な判断が受け入れられないとすると、フラストレーションがたまり、やっつけられないということになる、技術者のフラストレーションを発散させる仕組みを作って欲しいとの意見もあった。

我が木下先生からはまず、裁判の仕組みの枠組みで、技術者の不満や、技術説明の何たるかを議論するのは筋違いであることが指摘された。つまり、裁判というのは、真実を追究するだけではなく、その勝ち負けには、裁判官の価値観、原告側の論理構成、被告側の論理の正当性、被告を弁護する弁護士の取組姿勢、弁論技術の巧拙などが絡むために、裁判に勝つためには、裁判官の心証形成にプラスになるような論理構築をしなければならない。科学的に正しいと自分が信じているだけでは、裁判には勝てないとの指摘があった。

リスコミからみれば、コミュニケーションの効果は、送り手よりは受け手の条件によって決まるので、送り手が「こんなに一生懸命、話しても分かってくれない」と受け手を非難するのは筋違いであり、受け手の知識レベルや認識構造に合わせて、自分の論理構成や表現用語を最適に制御するのが送り手の義務である。

また、技術情報は、たとえそれが十分に理解されなくても、リスコミには必要不可欠である。どうやら一般市民は、技術情報がないと落ち着かず、自分達が騙されているのではないかと、軽く見られているのではないかと感じるらしいとの紹介があった。これに基づき、技術者には自信を持って説明して欲しい、とエールを送られた一方で、ただし、それは難解な技術情報をそのまま市民に伝えることを正当化したわけではなく、こういうところに、技術説明学の出番があるのではないかと提案された。

電中研の土屋さんからは、合理的な判断は一つだけではなく、違う論理もあれば違う合理性もある。違う観点から見ると、もっと違う正しさがあるのではないかと、その一例としてコンセンサス会議が紹介された。

また、フラストレーションがたまらないようにするために、話が通じたところと通じなかったところをちゃんと認識するようにとの示唆があった。つまり、話が伝わったところは素直に喜び、一方で伝わらなかったところについては、なぜ伝わらなかったのだろう、自分達の論理ではなく受け手側の論理は何なのだろう、と考えて、次は新たな試みの気持ちで説明を心がけてみてはどうかとの提案があった。

以上は、ほんの一端を紹介しただけであるが、以下のホームページから当日の発表内容やパネル討論などの議事メモが閲覧できるようになっているので、関心のある方は立ち寄ってみられることをお勧めする。

<http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/tkdlab/symposium.html>

6.3 第23回環境工学連合講演会(日本学術会議講堂、4月16～17日)

広報委員長 近本一彦

第23回環境工学連合講演会が下記のとおり、開催されます。

- 開催日 2009年4月16日(木)、17日(金)
- 会場 日本学術会議講堂/東京都港区六本木7丁目22-34、電話(03)3403-1056
[交通]東京メトロ・千代田線『乃木坂駅』下車、青山霊園出口を出てすぐ
- 定員 200名(定員に余裕がある場合は当日の参加も受け付け)
- 参加費 無料。講演論文集代(定価5,000円)は講演会会場にて。
- 参加の申込みは「第23回環境工学連合講演会参加申込み」と明記のうえ、氏名、勤務先、同所在地、所属学協会を記入して、4月6日(月)までに郵送、FAX、E-mailにより、下記幹事学会宛にお申込み下さい。
- なお、講演会に参加せず、講演論文集をご購入希望の方は「第23回環境工学連合講演会講演論文集購入希望」と明記のうえ、代金(5,000円)を添えて現金書留にて幹事学会事務局宛にお申込み下さい。講演会終了後に送本いたします。
- 申込先 社団法人日本水環境学会(担当 山本)
〒135-0006 東京都江東区常盤2-9-7 グリーンプラザ深川常盤201号
電話(03)3632-5351、FAX(03)3632-5352、E-mail:yamamoto@jswe.or.jp

プログラムの総合テーマは、「再生・再利用技術と循環型社会」です。当学会からは、以下の先生を推薦しております。

- 豊橋技術科学大学 エコロジー工学系 准教授 後藤尚弘
- 題目：モンゴル小村の物質フローと廃棄物処理システム
- 概要：モンゴル国ハトガル村（人口約 3000 人）は世界的に有名な観光地であるが、観光産業振興に伴って、廃棄物問題が生じている。本講演では、家計部門における物質フロー調査から、消費生活の発展に伴う社会の変遷を明らかにし、途上国小村の有効な廃棄物処理を提案する。

6.4 日本リスク研究学会 第 22 回シンポジウムのご案内

企画担当理事 長坂俊成

テーマ：リスクガバナンスを支える情報共有プラットフォームの現状と課題

－ 環境、防災、化学物質の事例を中心に －

開催趣旨：市民社会、消費社会の成熟化に伴い、リスクをさまざまなステークホルダーが協働して管理（統治）するという、リスクガバナンスの社会的な要請が高まりつつある。よりよいリスクガバナンスを実現するためには、専門家間の分野横断的な情報共有に加え、さまざまなステークホルダー間でハザード及びリスク情報を相互に活用できるリスク情報プラットフォームが不可欠となる。リスク情報プラットフォームは、科学技術の発展に加え、リスクコミュニケーションを通じた相互理解や社会的な意思決定を高度化させる役割が期待される。

そこで、本シンポジウムでは、化学物質、環境、自然災害の3分野のリスク情報プラットフォームを事例として、各プラットフォームのミッションとその技術的、社会制度的な課題を紹介いただき、分野を超えた語論を通じてリスク情報プラットフォームの将来像を展望する。

日時：平成 21 年 6 月 19 日（金）14 時～17 時

1 部 14:00-17:00 シンポジウム

2 部 17:20-19:20 意見交換会（山上会館内 地階レストラン）

会場：東京大学山上会館（東京都文京区本郷 7 丁目東京大学本郷構内（三四郎池隣り）

参加費：

・第一部 シンポジウム 【*当日払いも同額】

会員・協賛会員及び学生 2,000 円、一般 3,000 円（講演要旨集代を含む）

・第二部 意見交換会 【*当日払いも同額】

会員・協賛会員及び学生 3,000 円、一般 4,000 円（立食代を含む）

主催：日本リスク研究学会

14:00-14:10 【開会挨拶】東海明宏 会長（大阪大学大学院 教授）

【話題提供】 各発表者の発表 20 分＋質疑 5 分

1 14:10-14:35 「化学物質情報プラットフォームの研究開発」（仮）

亀屋隆志 横浜国立大学 准教授

<http://www.anshin.ynu.ac.jp/renkei/project.html>

- 2 14:35-15:00 「環境 GIS が目指すもの」(仮)
松本公男 国立環境研究所環境情報センター センター長
- 3 15:00-15:25 「データ統合・解析システム -データの相互流通性の支援-」(仮)
長井正彦 東京大学 地球観測データ統融合連携研究機構 特任助教
<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp/dias/index.html>
- 4 15:25-15:50 「災害リスク情報プラットフォームの研究開発」(仮)
長坂俊成 (独) 防災科学技術研究所 防災システム研究センター 主任研究員

*****休憩 10 分*****

【総合討論】 16:00-17:00

座長 片谷教孝 (本学会常任理事、桜美林大学リベラルアーツ学群基礎数理専攻 教授)
上記話題提供者をパネリストとして総合討論

専門家間によるリスク評価やリスクマネジメントのためのリスク情報プラットフォームの必要性やその実現に向けた技術的・社会制度的な課題に加え、市民等ステークホルダーのリスクコミュニケーションや個人のリスク対策の意思決定支援を目的としたプラットフォームのサービスや社会的な運用のあり方などについて討論する。

6.5 第4回 東アジアリスク研究会議 論文募集のご案内

日本側世話人 日本リスク研究学会

東海明宏・土田昭司・近本一彦

来る、2009年5月17-18(日、月)にかけて、第4回目を数えます東アジアリスク研究会議を北京師範大学にて開催することとなりました。詳細は、北京師範大学のオーガナイザー史教授、方助教授において最終の話をしている段階ですが、取り急ぎ、以下の内容をお伝えいたしますので、ぜひご参加のご準備をお願いいたしたく存じます。

開催場所 : 北京師範大学 <http://www.bnu.edu.cn/>

主催 : 北京師範大学、韓国毒性学会、日本リスク研究学会

日時 : 2009年5月17(日) - 18(月)

大会テーマ : 東アジアを対象としたリスク研究経験の共有

オーガナイザー : 史 教授 (北京師範大学)

事務局 : 方 助教授 (北京師範大学)

参加登録等 : まもなく、大会用ホームページが開設されます。

問い合わせ先 : 日本リスク研究学会事務局

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学社会学部 土田研究室気付

スケジュール：

- ・ 参加申し込み；テーマの登録 4月上旬
- ・ アブストラクト提出期限 4月下旬。アブストラクト集は、大会当日 **USB** メモリーで配布いたします。また、事前に大会ホームページからダウンロードできるようにいたします。
- ・ フルペーパーは、会議終了後（1ヶ月以内程度とご予定ください）に提出いただきます。

次の2通りの方法で刊行されます。

■プロシーディング：プロシーディング掲載を希望されたすべてのフルペーパーで、半年以内程度とご予定ください。

■Journal of Risk Research：JRR 誌で、この会議の特集号を刊行いたします。これをご希望される方は、期日までにご投稿いただき（会議終了後3ヶ月程度とご予定ください）査読の結果、受理された論文が掲載されます。なお、受理されなかったフルペーパーは、プロシーディングに、アブストラクトのみの掲載となりますことにご注意ください。

※引き続き、申し込み方法など詳細はおって連絡をいたします。

6.6 学会法人化に向けた内部検討

法人化推進委員会

学会法人化に向けて、第10期役員では、深田智久監事に予備的検討を進めていただいております。第11期では、第10期における活動を継承し、諸般の情勢を考慮し、さらに内部検討委員会を発足させ、今年度末をめどに学会法人化にむけた原案を作成するべく検討しております。常任理事会と随時連携し、次回の総会を目標に、検討を進めております。

法人化推進委員会：深田、三上、土田、片谷、長坂、東海

検討のスケジュール：

第10期 情報収集と予備的検討（深田）

第11期 学会法人化制度の情報の共有、検討のための資料作成、原案の作成
（文責 東海明宏）

7. 委員会報告

7.1 【編集委員会からのお知らせ】日本リスク研究学会投稿規程の変更など

日本リスク研究学会誌編集委員会 甲斐倫明

日本リスク研究学会編集委員会は、学会誌の季刊を目指した編集とリスク学への貢献を推進するために、理事会での承認を受けて、次のように投稿規程を変更いたしましたのでお知らせします。(投稿規程の詳細は学会 HP に掲載されています)

1) 論文分類を変更しました。

原著論文 (従来の研究論文に該当します)

資料論文 (実験・調査研究の成果を速報的にまとめた研究論文)

総説論文 (従来の解説論文に該当します)

以上は査読があります。その他として、情報、レター、書評があります。

従来に比べて、資料論文、総説論文、情報、レターを増やすことで論文数を拡大していきたいと編集委員会は考えています。

資料論文は、リスクに関する理論または調査結果など(本学会の研究発表会に発表されたものを含む)の継続中の研究を速報的にまとめた研究論文です。原著論文として投稿するには完成度は高くないが、データまたは理論としては新規なものとして速報的に報告する価値がある場合に利用するものです。掲載までの時間も原著論文に比べて早くなるような差別化をしていく予定です。

総説論文は、編集委員会から依頼する場合と、会員が投稿する場合がありますが、いずれにしても、リスクに関連する特定の分野または関連するいくつかの分野にまたがった幅広い知識を提供することが目的です。学際的なリスク学の分野にとっては重要な論文ですので、充実していきたいと考えています。

レターは、会員の意見交換の場として設けたものですので、活発な利用を期待しています。

書評は、最近発刊されたリスク学に関連した書籍を会員に紹介するコーナーです。会員からの積極的な投稿を歓迎いたします。

従来、研究論文は完結したものに限りなりましたが、資料論文を設けることで、速報的な研究成果を投稿することができるようになりました。また、総説論文では各リスク分野の現状を会員に広く周知するための情報を提供できるようにしたいと考えています。

2) 論文の投稿者は非会員に拡大しました。ただし、投稿料を 6000 円とします。会員でない近くの仲間へ声をかけてリスク学会誌の投稿を勧めてください。ただし、投稿者とは筆頭著者あるいは連絡責任著者とします。

3) 論文の「未発表」について明記し、日本リスク研究学会年次大会講演論文集などの学会発表のための要旨集に相当するものは含まれないことを強調しました。従来、自分の成果が未発表に該当するのかわからないという質問があります。その場合は、編集委員会事務局にメールで連絡をしてください。

投稿規程にはありませんが、査読のスピードアップ化の仕組みを取り入れました。これによって、投稿論文ができるだけ早くアクセプトし掲載できるように努力していく所存です。

電子投稿システムの改良を行い、スパムメール間違い対策のために、メールの件名には日本語表記（例：SRA-Japan 投稿完了：SRA9999A）を取り入れました。

これまで以上に日本リスク研究学会誌に投稿していただき、学会誌がリスク学の発展に貢献できるように会員の皆様のご協力をお願いいたします。

7.2 学会表彰委員会

学会表彰委員長 加藤順子

平成 21 年 1 月 9 日（金）、第 3 回学会表彰委員会を開催し、平成 20 年度の反省と 21 年度に向けての準備について討議した。主な内容は下記のとおり。

① 20 年度は推薦受付および選考から受賞講演依頼までに時間がかかり、受賞者の方に迷惑をかけた。講演依頼に 1 ヶ月のリードタイムを取るとすると、10 月末までには選考にかかるプロセスをすべて終了させたい。また、表彰委員会と年会実行委員会の役割分担が不明確であったことも講演依頼の遅れを生じた。

② 今回は 20 周年記念として受賞者の人数を多くしたが、来年度は人数をもう少し絞ることとした。また、幅広いジャンルからの選考を確実にするため、学会表彰委員会委員の幅と人数を増やすこととし、災害分野、経済（保険）分野、社会文科系分野から新委員をリクルートすることとした。

③ 平成 21 年度に向けて、受賞者推薦フォームおよび日程・手順を確認した。本年度の年次大会は 11 月 28 日、29 日（早稲田大学）であることから、逆算して、推薦の呼びかけを次回理事会（6 月）、推薦の締め切りを 8 月末とし、延長しないですむよう、途中でリマインダーを出すこととした。また、受賞者講演に関する大会実行委員会との役割分担の調整を 6 月理事会の際に行うこととした。

8. 事務局便り

8. 1 日本リスク研究学会第44回定期理事会（第11期第1回）議事録

日 時：2008年11月28日（金）17:00～20:00

場 所：関西大学100周年記念会館第1特別会議室

出席者：内山、大島、甲斐、片谷、関澤、近本、土田、東海、長坂（敬称略，五十音順）

委任状出席：岡田、加藤、倉田、佐藤、高尾、田中、田村、中谷内、深田、前田、間正、松本、盛岡、森澤、森宮、山田（敬称略，五十音順）

内 容：

I 報告事項

1 会員異動（新入会、退会）について、事務局から報告があり全て承認された。

2 学会ホームページ及び学会誌に掲載される役員名簿が確認された。

3 編集委員会報告

- ・ 18巻2号の目次案と進捗状況が報告され、12月末発刊予定であることが確認された。
- ・ 別紙第11期第1回編集委員会議事録に基づき、編集方針として、季刊を目指す方針と論文分類の見直し、査読の迅速化の方針が報告された。
- ・ 電子投稿システムの改善状況が報告された。

4 広報委員会報告

- ・ ニュースレターの発行実績と予定が報告された。

5 事業委員会報告

- ・ 今年度新規事業として11月28日に実施された若手会員が企画するワークショップの公募事業の実施概要が報告された。

6 情報管理委員会報告

- ・ 別紙第1回情報管理委員会の議事録に基づき、学会ホームページの改善や運用マニュアルの作成状況が報告された。また、年次大会の発表論文タイトルのデータベース化、英文ホームページのCMS化、各委員会担当ページのモジュール化に向けた検討状況が報告された。

7 学会表彰委員会

別紙に基づき、委員会活動の報告と学会賞3名と奨励賞4名の受賞者が決定したことが報告された。

【学会賞受賞者】

田中 勝 氏（鳥取環境大学 研究・交流センター 教授）

遠山千春 氏（東京大学大学院 医学系研究科 教授）

吉田喜久雄氏（(独)産業技術総合研究所 安全科学研究部門 主管研究員）

【奨励賞受賞者】

岸本充生 氏（(独)産業技術総合研究所 安全科学研究部門 グループ長）

中山亜紀 氏（京都大学工学系研究科 都市環境工学専攻 助教）

東野晴行 氏（(独)産業技術総合研究所 安全科学研究部門 グループ長）

村山留美子氏（京都大学工学系研究科 都市環境工学専攻 助教）

8 法人化検討委員会

- ・ 11期役員第3回常任理事会で法人化検討に関し、深田監事からの報告に基づき、現状の動向と方針について意見交換し、今後の法人化に向けた方針案を定めたことが報告された。

9 その他

- ・ 第2回横断型基幹科学技術研究団体円号シンポ（12月4-5日）に、甲斐理事、中谷内理事がコーディネーターとして参加、土田理事がシンポに参加したことが報告された。
- ・ 第23回環境工学連合会講演会（2009年4月予定）の本学会からの講演者として後藤会員（豊橋技術大学）を推薦したことが報告された。
- ・ 片谷理事を、法人化担当として第11期新常任理事に就任を依頼し受託された。
- ・ リスク学辞典韓国語版の出版の打診が阪急コミュニケーションズより受け、受託の方向で調整していたが、企画が頓挫したこと、その事後対応を阪急コミュニケーションズに求めていることが報告された。

II 審議事項

1 学会表彰委員会

- ・ 別紙表彰規定の修正案に基づき審議し、第10条の一部（「を適切な受賞者に対して授与するものとする」を、「を設置する」と修正し承認された。その他の字句修正などの軽微な修正は会長に一任された。

2 2009年シンポジウム

- ・ 2009年6月19日（金）東京大学山上会館にて開催することが承認された。なお、テーマの企画担当者については、事業委員長の長坂常任理事とし、リスク情報の共有プラットフォームをテーマに、環境と防災等の事例を報告し、その他のリスクを含めてディスカッションする方向で調整中であることが報告された。

3 2009年年次大会

- ・ 早稲田大学を会場として、村山会員が実行委員長として開催することが承認された。

4 2009年東アジア会議北京大会

- ・ 本会議の企画は、国際組織委員会の責任で進められることを前提として、本学会としては、土田常任理事を責任者として、常任理事会で原案の検討を開始することが承認された。

5 法人化について

- ・ 深田監事らによる法人化検討委員会の報告に基づき、常任理事会で審議した結果を踏まえ、今後、法人化推進委員会（委員長；深田、副委員長：三上、委員：片谷、東海、長坂、土田）を設置し、社会法人化（公益認定を受ける）の方向で検討・準備を進めることが承認された。
- ・ 法人化に向けたスケジュール：2009年6月（定款、選挙制度案作成し登記）、2010年3月（選挙告示）、2010年5月（投票）、2010年6月（開票・総会）

6 人材育成及びCPD

- ・ 常任理事会では、前田常任理事が担当し、内山理事、盛岡理事に相談し、課題を整理することが確認された。

7 編集委員会事項

- ・ 投稿規程の変更案が以下のとおり承認された。
 1. 2 現 投稿者は会員でなければならない。
新 投稿者が非会員の場合、投稿料を 6000 円とする。投稿者とは筆頭著者あるいは連絡責任者とする。
 1. 8 は削除
- ・ 電子ジャーナルの刊行について、アブストラクトのみ刊行と同時に学会ホームページで公開することが承認された。本文の電子化については継続審議とする。

以 上

8. 2 年会費 (2009 年度) 振り込みのお願い

年会費の振り込みをお願い申し上げます。同封の郵便振替書をご利用下さい。通信欄には宛名ラベル右下に記載の番号(登録番号)をご記入下さい。「名誉会員」の方はお振り込みの必要はございません。

会費は、日本リスク研究学会誌のみ購読会員(一誌購読)と、日本リスク研究学会誌・Journal of Risk Research 購読会員(二誌購読)の2種類になります。

【お願い】2009 年度より Journal of Risk Research 誌購読(二誌購読)への変更をご希望の場合は、お振り込みの際お手数ではございますが、必ず“『二誌購読に変更希望』”と通信欄にご記入下さい。JRR の購読を中止される方は必ずその旨お書き添え下さい。購読誌の変更手続きをいたします。

	入会金	年会費(日本リスク研究学会誌と JRR 購読)	年会費(日本リスク研究学会誌のみ購読)
正会員	¥3,000	¥12,000	¥6,000
学生会員	無料	¥9,000	¥4,000
賛助会員	¥10,000	¥50,000	¥50,000
名誉会員	無料	無料	無料
購読会員	¥3,000	¥13,000	¥6,000

JRR : Journal of Risk Research

「入会金」は入会初年度のみのお振り込みです

8. 3 過年度会費未納の方へお振り込みのお願い【至急】

過年度(2008 年度を含む)会費をまだお振り込みでない方は、至急下記までお振り込み下さいますようお願い申し上げます。お振り込みの確認ができましたら、発送を停止しております学会誌をお送りいたします。

【郵便振替口座】口座番号：00330-0-11964

加入者名：日本リスク研究学会

8. 4 平成 21 年度 総会開催のお知らせ

平成 21 年度の総会を下記のように開催いたします。ご出席くださいますようお願いいたします。

総会にご欠席の場合は、必ず同封の委任状(6 月 16 日(火)〆切)をご提出ください。

会場： 東京大学 山上会館

(別紙案内図または http://www.u-tokyo.ac.jp/campusmap/cam01_00_02_j.html 参照)

日時： 2009 年 6 月 19 日 (金) 13:00 ~ 14:00

8. 5 第 22 回シンポジウムの開催

第 22 回シンポジウム 2009 年 6 月 19 日(金)14 時~19 時 20 分 (一・二部) 東京大学山上会館

『 リスクガバナンスを支える情報共有プラットフォームの現状と課題

— 環境、防災、化学物質の事例を中心に — 』

※詳しくは「6. 4」あるいは同封のチラシをご覧ください

※講演タイトルなどの最新情報は学会 HP あるいは会員 ML でご案内いたします

8. 6 第 4 5 回 (第 1 1 期第 2 回) 理事会の案内 (役員の方はご予定下さい。)

会場： 東京大学 山上会館

日時： 2009 年 6 月 19 日 (金) 午前 10:00- 12:00

8. 7 第 22 回年次大会の案内

第 22 回年次大会

◇ 日時： 2009 年 11 月 28 日(土)–29 日(日)

◇ 場所： 早稲田大学 大久保キャンパス (4 月から名称変更「西早稲田キャンパス」) [169-8555
東京都新宿区大久保 3-4-1]

最新情報は学会 HP あるいは会員 ML でご案内いたします

8. 8 学生会員の皆様へ

学生会員の方には学生証のコピーを毎年 4 月 1 日以降提出していただいております。

郵送がまだの方は、早急に学会事務局係宛にお送り下さい。

8. 9 変更届

ご連絡先 (ご住所・e-mail 等) に変更が発生した場合は、事務局係 (e-mail : office1@sra-japan.jp,

Fax : 06-6841-1938) まで早急にお知らせ下さい。

8. 10 日本リスク研究学会共催・協賛イベント一覧

【2008 年度】

- 1) イベント開催日：平成 21 年 1 月 19 日,26 日、2 月 2 日,16 日,23 日、3 月 2 日いずれも(金)
共催・協賛の別：協賛
主催：「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局
イベント名：大阪大学大学院工学研究科「環境リスク管理のための人材養成」プログラム特別講演会
(6 回シリーズ)
会場：大阪大学中之島センター7 階講義室 2
会費：無料
連絡先：「環境リスク管理のための人材養成」プログラム事務局
大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻 担当：森下・長濱
Tel : 06-6879-4733 Fax : 06-6879-4733
E-mail : risk-office@em.see.eng.osaka-u.ac.jp

【2009 年度】

- 1) イベント開催日：平成 21 年 4 月 16 日 (木)～17(金)
共催・協賛の別：共催
主催：日本学術会議土木工学・建築学委員会
イベント名：第 23 回環境工学連合講演会
会場：日本学術会議講堂
参加費：無料
連絡先：日本学術会議事務局参事官（審議第二担当）付 生形・加藤・関
Tel : 03-3403-1056 Fax : 03-3403-1640 E-mail : s253@scj.go.jp
- 2) イベント開催日：平成 21 年 7 月 9 日(木)～11(土)
共催・協賛の別：協賛
主催：社団法人日本機械学会
イベント名：第 19 回環境工学総合シンポジウム 2009
会場：財団法人おきなわ助成財団・沖縄県男女共同参画センター「ていりる」
連絡先：社団法人日本機械学会環境工学部門 担当：宮原ふみ子
Tel : 03-5360-3505 Fax : 03-5360-3509 E-mail : miyahara@jsme.or.jp

以上

9. 編集後記

今回のリスク放談は、名誉会員になられた小林先生にお願いした。お人柄がよく表れた文章で、あくせくしていたり、ギスギスしていたり、心が荒んでいる世の中を何かふあ〜と包み込んでくれる、陽だまりにいる感覚にさせてくれるような文章である。そんなタッチでエールをもらった若者たちは、知らず知らずのうちに肩の力を抜いて、自分なりに頑張ってみようという気持ちにさせられるのではなかろうか。

小生もあの映画は観たが、最後にそのような詩が流れていたとは、先生の文章を読んでそう言われてみればと思う程度にしか印象がない。寺尾聡の演技がすばらしく、「雨あがる」の頃からだろうか、役者としてすごく良い感じだなあ、やはり親父さんの血を受け継いでいるんだなあ、この作品はきっと彼の代表作になるなあ、とそんな感想だけを持っていた。小林先生との情動的な感受性の違いを痛感した。

先生も指摘されておられるが、翻訳とか通訳というのは本当に難しい。翻訳・通訳というと、ついつい西洋語と思うかもしれないが、我が国は古来、中国から多くのものを学んできた。つまり、日本において翻訳といえば、始まりは中国語のはずで、最初は誰かが翻訳をして、それを解釈しながら、勉強してきたはずである。「論語」も「孟子」も先人の翻訳物を勉強していたのである。決してオリジナルを読み、オリジナルの意味合いを解釈したのではないのだが、これらの勉強が今の日本の礎となったのである。そう考えると、日本はそもそも、翻訳文化なのかもしれない。

正確に翻訳されていることに越したことはないが、そうでなくても、正しいことは心に響き、文化間の違いはあれ、その文化と相互作用していき、良いものが築き上げていかれるのであるが、これが政治、特に外交に絡むことだと話は変わってくる。そのような場面では、翻訳・通訳というのが非常に重要になってくる。

故吉村昭氏の小説に「黒船」というのがあるが、この中に、通詞の話が出てくる。ペリー艦隊が日本に来たとき、通詞にあたったのが、オランダ小通詞の堀達之助である。堀氏は、オランダ語の通訳には困らなかったが、英語は読解ができるだけなので、オランダ語の分かる米国人とオランダ語で交渉した。ところが、異国船を検分する役目の奉行所与力の中島三郎助がペリー艦隊に行った時に、面談を米国側に拒否されてしまう。その理由は、米国の士官は、日本の最高位のものとは会わないというのである。堀氏はとっさに、中島氏を副奉行様だと言ってしまう。中島氏が何も役目を果たさず、引き返せば、お咎めをくらは分かっていたので、とにかく乗船して調査させなければと、通詞が機転を利かしてウソをついたのである。この機転のおかげで、中島氏は無事、調査をすることができたが、自分より更に上の役人が奉行の意向を翌朝伝えると約束したものだから、話がこじれていくことになる。中島氏は副奉行ということになっているために、それより上ということになると、奉行しかない。しかし、奉行自らが米国船に出かけることは許されないために、別の与力を奉行に仕立てるはめになる。このために、本当の浦賀奉行である戸田伊豆守は、奉行として米国との交渉にあたることは出来なくなったために、ついには老中と偽ってペリーと対面することになる。現代でも本当にあつたら大変そうな話だが、これが当時の鎖国をしていた封建的な時代に行われたのであるから、その大変さには想像を絶するものがある。言葉が通じたとしても、腹の探りあいをしている間柄で、しかも言葉が双方にとって分からないのであるから、通詞の役割は重大である。通詞を介してしかお互いが見えないのであるから、当時の通詞の方々は、日本国の行く末を背負って仕事をしていたのだと思うと、その責任の重さに潰されそうになったことと思う。

歴史的な重要な曲面では、こうした通訳の問題が表れるようであるが、先に紹介した意図的なウソ（誤訳）とは違って、第二次世界大戦とのときは、意図せぬ誤訳の問題が起こっていたという。同時通訳のパイオニアである西山千氏は、その著書「通訳術と私」において、こう記している。ポツダム宣言が発表され、日本の無条件降伏が要求されたとき、日本の状況としては弱気な発言をすることはできなかつたし、同時にもっと様子を見てから最終判断しようとした。そこで、内容的には静観したいという意味のことを公に弱気だと見られないような強気な言葉で表現したかったとして、最終的に「黙殺する」という言葉に決定した。この言葉の裏には極めて重要な、しかも微妙なニュアンスが含まれていたのだが、連合国側は、これを「ignore」という言葉に翻訳したというのだ。誰がどう訳したかについては、諸説あるようであるが、ignore と訳され、それが reject と解釈されたようである。だから、原爆が落とされたわけではないだろうが、何かのきっかけを作った可能性は否めない。「ベルリッツの世界言葉百科」には「言葉が歴史を変える例」として、「黙殺」が、「もしたった一語の日本語を英訳する仕方が違っていたら、広島と長崎に原爆が投下されることはなかったかもしれない」としている。

当学会のテーマの一つであるリスコミと同様に、翻訳も双方向で行い、お互いの文化交流を下地とした翻訳というものがあれば、誤訳も少なくなるのではなかろうか。日本における翻訳の歴史を顧みて検討してみること、今後の日本における外国との交流において意義あるものと、小林先生のリスク放談を読んで思った次第である。

広報委員長 近本一彦

